

Title	基本人権(第Ⅰ部) : ホセ・アントニオ・プリモ・デ・リベラの講演談話二篇(訳)
Author(s)	山崎, 俊夫
Citation	大阪外国語大学学報. 71(1-3) p.197-p.207
Issue Date	1986-03-31
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81100
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

Ⅲ. 文化資料 (3)資料

基本人権 (第Ⅰ部) :

ホセ・アントニオ・プリモ・デ・リベラの
講演談話二篇 (訳)

山 崎 俊 夫

Dignidad Humana(Parte I) : Dos artículos de discursos por el
José Antonio, Primo de Rivera(Traducción)

Toshio YAMASAKI

Sumario

Dignidad Humana, sobre que por este tema, comparando internacional, tengo el intento de presentar dos partes de traducciones : Parte I ... Dos artículos de discursos por el José Antonio, Primo de Rivera, y Parte II ... La Constitución Política del Perú. Al primero, por mediante de este número de nuestro volumen universitario, hemos tratado de la Parte I. Y, sin embargo, seguiremos adelantar a desarrollar la parte II, en más breve, próximo.

Mi librito de Geirin Shobo, "Empresas Turísticas y Gobierno", 1978, Tokio, ya contiene la oración original de José Antonio, y esta vez, además de aquélla, hemos añadido una poquísima otra más corta, pero muy señalante planteándonos un punto de vista problemática especialmente en cuanto a la femenina. Como texto que hemos empleado, véase "Dignidad Humana y Justicia Social", por José Antonio, Primo de Rivera, Ediciones de Movimiento, Madrid, 1957.

(1) イスパニアと蛮族異人種文化

明日で、この同じ劇場において国家産業労働組合防衛会議 (J.O.N.S. *las Juntas de Ofensiva Nacional-Sindicalista*) の労働機関党 (*la Falange Española*) がイスパニアに対置して登場出現してから一年になる。

上述の当時の頃には、J.O.N.S. (国家産業労働組合防衛会議) と *Falange Española* (イスパニア労働機関党) によって統合せられている諸中核体の融合 (*la fusión*) が既に実現しており、従って、その当時以来、J.O.N.S. (国家産業労働組合防衛会議) の *Falange Española* (イスパニア労働機関党) を取消不能なものに確乎画抜的に構成しているのである。上述の儀式 (*acto*) が上述宣伝顕示の最初のものであり、かつ、積極的に万事不撓不屈の意気込みを以って闘争 (*tiros* 強引な突張り) を

終結したが、殆ど常に云えることながら、闘争（*tiros*）の開始こそが、理解を取りつけるに到る最良の方法（やり方 *manera*）なのである。今年はわれわれは大いに地歩を進めて来たのであったが、われわれは、1934年には或いはとても信じられなかったほどの確乎たる成長振りを示すように心掛けて行かなければならないのである。つまり、一年後には、われわれの行動（*movimiento*運動）は知的に成長した聡明な横顔を見せていなければならないのである。

われわれのことを考えて、街頭に何かこう激突（*la fuerza de choque*）が起ってその後に思慮分別のある人々の手に（*cargo*担当責務が）委ねられて納まって行く（一件落着に走って行く）ものと思ひ込んでいた人たちがあった。然し今はもうそんなことを考える人はいないのであり、かつ、われわれの側では、明示的な表白の仕方ではっきりと忌むしく思うのは、前衛隊ではなくて軍隊の無いことであり、イスパニアに扶植導入して樹立しなければならないのは、新たな秩序を伴った完全装備の軍隊（*ejército*人民戦線派の軍部）なのである。つまり、これこそイスパニアが扶植導入して樹立しなければならないものであると私は申し立てているのであり、かつ、敢然として付言する所以は、イスパニアは斯うしてこそ、イスパニアがヨーロッパにかつまた世界に通報すべき新秩序のものとなるからなのである。

歴史の時代区分は古典と中世の時代に分けることができる。上述のこの後者（中世時代）は統合の摸索探究に赴くが故に特徴付けられる。前者（古典時代）は上述のその統合の既に存在していた時代なのである。古典時代はまさに完璧に、ひたすら食い潰しに、消衰の惨状に、蛮族異人種文化の侵入に終始した。ローマが上述のこの過程をわれわれに提供し呈示したのであった。その上昇成長の（ローマの）中世時代は、*Cannas*（カンヌの戦い）から *Accio*（アキオの合戦）まで続く。つまり、そのローマの古典時代は *Accio*（アキオ）から *Marco Aurelio*（マルコ・アウレリオ：マルコス・アウレリウス）の死までである。そのローマの衰退は *Cómodo*（*Lucio o Marco Elio Antonio 161-192*; コーモド、ルシオ若しくは又の名マルコ・エリオ・アントニオ；マルコス・アウレリウスの息子でローマ皇帝、180年に父皇帝の位を継ぐ。毒殺されて死去。）から蛮族異人種（*los bárbaros*）の侵入までの時代である。ローマにおいてその崩壊に終止符を打つことになった二つの溶媒（*los dos disadventes* 融合媒体）が作用し始めたときにはローマは完璧であったし、ローマは世界の統合体（*unidad* 統一体）であった。つまり、ローマにそれ以上為すべき何ももの残されていなかったのである。外延的拡張（*Todo lo externo*）はすべて実現せられ為し遂げられていた。また、ローマは対内的生活の事業を有しなかったのである。つまり、その（ローマの）宗教は祭祀（*ceremonias*）を規制する範囲にとどまっていた。その（ローマの）倫理道德は武器（弓矢）に関する、軍事的、公民的愛国心のモラル（倫理道德）であった。（都市国家の市民的愛国心を倫理道德の教条としていた。）ローマが建築（構築）せられる時までは素晴らしい発条（ネジ・ぜんまい）であった。然し、一旦建設が終るともはや無用の長物になった。それ故ローマの疲弊は対内的生活事業に向けての復帰の二つの動き（運動）に埋没して身をひそめてしまうことになった。第一はわれらが *Séneca*（セネカ）のストア哲学（精神）であり、これは今以って沈着冷静な知的活動になり切って定着してしまってい

る。続いてキリスト教（精神）であるが、これはローマの諸原則の否認であった。賤民と被抑圧者の宗教であり、*César*（シーザー）に対して彼の神聖と聖職の権威を拒否する能力をもつものである。キリスト教は動揺するローマの足元（基礎）に切崩しの穴を掘りあけたのである。然し、ローマが破局、蛮族の侵入を雨散霧消して消失せしめてしまう時期までには未だ到らず、時間的な距たりがあった。

われわれは今まさに、中世の後に、ローマの古典時代に続いた世代の終末に位置している。ローマの崩壊の後に歴史的な休耕（休閑の一服）とでも云えるものが始まった。その後やがて文化の新たな芽生えが兆ざし始めた。統合の根着きがヨーロッパに燎原の火を点もした。そして13世紀が到来する。*Santo Tomás*（サント・トマス）の世紀である。この時代には、すべての人々の理想（*la idea*）は形而上学的（精神的）統合であり、神への（神における）統合である。上述のこの絶対的真理（*estas verdades absolutas*）が保たれるときはいつさいが説明して解明せられ、かつ、全一的完全世界は、この場合、ヨーロッパが幾世紀もの最も完全な経済によって機能するものとなる。パリとサラマンカの諸大学では同じラテン語で同一テーマに関して推論考究する。世界はそれ自体が一つになって一体化している。やがてイスパニア帝国が現われるが、これは即わち、歴史的、具象的、精神的かつ神学的な統合体なのである。

18世紀の30年代の頃に苦悩、不安の時代が始まる。社会はもはや自らのそれ自体を信用しなくなった。また、いかなる高度な原理原則にも以前の効力を以ってしては信頼を置かなくなった。上述のこの信義（信義則への確信）の欠如は、もう一度完全なものになって来た（完全さを取戻した）社会の苦悩（*pesadumbre* 悲歎）とは反対に、か弱い精神を逃避へ、自然への復帰へと押しやった。

Juan Jacobo Rousseau（フアン・ハコボ・ルソー）が上述のこの拒否を代表する。かつ、絶対的真理が存在することへの確信（信義則）を喪失したが故にこそ彼の社会契約説を創始（*crea*）したのであり、そこでは（彼の社会契約説では）事物（*las cosas*）は存在の規範基準（*normas de razón* 根本原由の諸規範）によるのではなくて任意の自由意思についての諸規範によって動かされなければならないことを説いた（*teoriza*）経済学者たちが現われて、商品の、価値の及び交換（*cambio* 交易）の諸概念に關説することにより歴史を説明し解釈（*interpretar*）した。巨大産業企業（*la gran industria* 大工場）が出現し、上述のそうした巨大産業企業（大工場）を以ってする職人のプロレタリアへの変遷移行が生じた。急進扇動的革命家が現われ、失意のどん底に突落とされて絶望に帰せしめられたプロレタリア階層集団を見出し、かつ、上述のそのことがそうした程度までに到ったために1914年の大戦に炸裂したことを無限の進歩に思わしめたのであるが、実はそれはヨーロッパの自殺行為になったのである。

Santo Tomás（サント・トマス）のヨーロッパは一個同一の同じ思想によって説明せられたヨーロッパであった。1914年のヨーロッパは、一つにまとまることを欲しない（まとまろうとしない）確信肯定的確認を齎らした。欧州大戦の産み出した産物は職業を持たない人たちの集団（多数の失業者）の創出造成であった。上述のその惨状（*catástrofe* 惨禍）の後には工場は動かなくなり、定

職のない人々は尠大な失業者の群れになってしまった。産業（工業）企業は足場を見失って諸工場の併存競合が生じ、また関税障壁が樹てられた。上述のこうした情勢の中では更に加うるに、永遠不朽不滅の諸原理へのいっさいの信倚性信仰が失われ、一体ヨーロッパには何が隣人として定住することになったか。疑いもなく、蛮族異人種文化の新たな侵入が定着したのである。

然しながら二つの論文命題が存在する。破局的災難説（*la catástrofe*）は侵入を不可避的なものであり、かつ、良いものを消失させだいなしにしてしまうものとして見ている。つまり、上述のその災難説は、災禍の後に新たな中世時代が芽生え始めると信じているのである。然し、われわれの論文命題は蛮族異人種文化の侵入の上に橋を架けることを目指すのである。要するに、災禍を媒介とすることなしにでも、その限りでそのままでも結構新たな時代が豊かな実のりを結ぶ筈であり、われわれの生きている時代に、いっさいのあらゆる文明開花（*civilización*）の精神的価値を救出済度しようとするのである。

上述のそうした事柄が、われわれの抱く恐怖恐威の蛮族異人種文化の侵入であるロシア共産主義に対処するわれわれの仕事（*tarea* 課業）なのである。共産主義には何か斯う次のように集約され得るものがある。つまり、その自己制約性（*abnegación* 自己放棄・自己犠牲）であり、その共同連帯性（*solidalidad*）の感触（*sentido* 意味内容）である。さて、ところでロシアの共産主義は、それ自体蛮族異人種文化の侵入としては激しく行き過ぎであって、歴史的かつ精神的な価値を意味し表わし得る筈のいっさいのものを揚棄し捨ててしまうのである。つまり、反祖國的であり、神への信仰（*fe*）に欠けている。上述のこのことの故に、われわれの努力は絶対的な真理を、歴史的な価値（*valores* 価値判断）を救済・済度し、それらが死滅しないための防衛の努力となる。

いったいどうすれば上述のことが（それが）なされ得るだろうか。（このこと）これこそが此処で、カスティリャで、かつイスパニアで解答をこれから持ち始めて行く質問点（質疑の問題点）なのである。

望まれ考えられる諸解決の中の一つは社会的民主主義（*socialdemocracia*）である。社会的民主主義は本質的には（かなめには）資本主義を維持保存し保持して行く。けれども土砂をベアリング（軸受け）に投げ掛け投げ飛ばして廻らないようにする働らきを持つのである。これは全く見当外ずれで馬鹿げた話であり、結果は思うに任せずまゝならないことになる。

もう一つの考えられる解決が全体主義国家である。然し、全体主義国家なるものは現存しない。国家政府に（*al Estado*）取って替る（政府交替劇・クーデターを演じる）ために努めた奇想天外な（天才的で奇抜な）軍事政権のあった国（民族国家 *naciones*）がある。けれども、これは真似られないものであり（真似のできない無理なことであり）、かつ、イスパニアでは今日現在ではそのような英才（*ese genio*）の出現をわれわれは期して待ちもうけるしか致し方がない。全体主義国家と呼ばれるものの典型はドイツとイタリアであるが、君たちはこの両者には類似性があるのではなく、根本的に逆の性格のものであることに注意してもらいたい。つまり両者は対蹠点的な逆の足場に根着いているのである。ドイツのそれ（全体主義国家）は民族的（人種的）本能における国民（*un pueblo*

民族) 的信念から出た能力に根着いたものである。ドイツ民族はみずからの(自民族自体の)感情の赴くままに(*en el paroxismo de sí mismo* 発作激情的に民族精神作興昂揚の赴くところ)国民精神昂揚への状態を示している。つまり、ドイツには超民主性(的なもの)が息付いている。ローマは逆に(これに反して)古典精神についての才能(*genio* 天分・天才)を駆使支配する(*poseer*)体験へと一貫して赴いたのであり、その精神は上からの(統合せられた)民族(*pueblo* ラテン民族)を形成しようと欲したわけである。ドイツ人(民族)の行動は浪漫主義的(主情的・空想的)タイプのものである。その指針(彼らの目指すところ)はいつもの(*de siempre* 常に変らぬ)それ(*el*)指針である。(磁石の指針は常に北を指している。永遠不滅の真理を指している。)だからこそ彼の地から(*de ahí* そこから)宗教改革(*Reforma*)が生まれ(発足し)あまつさえフランス革命まで生じたのである。つまり、人間の諸権利の宣言は、ドイツ(人)のプロテスタント(新教)思想の申し子(*hijas*)である北米合衆国憲法のコピー(*copia* 模写・複写)なのだからである。

民主(的)社会主義も、天才(*un genio*)の無い(なしに)全体主義国家を積重ねて組立てる(*montar*)意図もまた災禍を回避するには不充分であった(もの足りない、不足である)に違いない。特効薬(*ungüento* 膏薬, 塗り薬)にはもうひとつ別の種類のものがあってイスパニアではそれをわれわれはふだんに惜し気もなく使用している。わたしの云っているのは連合、ブロック(共同体)及び同盟である(*confederaciones, bloques y alianzas*)。すべては小さなものでも集まれば大きく巨大なものになる(*la union de varios enanos es capaz de formar un gigante* 小人の集まりでも結合すれば巨人を形成する能力をもつ)という想定からである。上述のこの種の救済手段には深慮が必要である。かつ、われわれは言葉の綾にまどわされているわけには参らない。こうして、上述の(小人弱者の連合集団の)動きがあり、彼らはそのプログラム(綱領)の第一の支柱として宗教を誇示した。然しながら、それはたゞ単に物物的(物質的)利益(*ventaja* 有利性)となる意味合いでの地歩を占めた(その部署・地位を占めた)に過ぎないのである。つまり、農地改革における緩和穏健化策若しくは聖職者(僧侶団)の資産における托鉢の一椀(ほどのもの)に変えるに(と交換に)学校(諸学派)でのはりつけ刑(架刑)を若しくは離婚の法令廃止(不法行為取締法令廃止)を権利を放棄して委譲した(程度)に過ぎないのである。

また別の(他の)彼ら(小人共の集団)社会集団の中のブロック(共同ブロック連合体 *bloques*)には、例えば協同組合を宣言したものがある。(だが)それは作文(文章)に過ぎない。先ず最初に上述のこれ(宣言文)について、われわれに次のことを語りかけているかどうかを質してみよう。つまり、「あなたは協同組合が何か(協同組合なる言葉によって何を考えているか)お分かりですか」「それは何をやるものですか(どのように機能していますか)」「例えば国際的諸問題(国際問題)にそれは何か解決を下だしていますか(どんな解決裁定をしていますか)と(という質問である)。これまでのところ、最良の試み(*ensayo* テスト)はイタリアでなされて来ている。しかも(そして)、彼の地(イタリア)では完全な(全ったくの)政策機械にくっつけられた(付属した)一つのかけら(断片)にしか過ぎないのである。それ(協同組合)は使用者(*patronos*)と労働者(*obreros*)

との間に調和調整（*armonía* 和合均衡）を求めるための、何かこう、わが国の馬鹿でかく膨らんだ調停混成審判機関（*nuestros Jurados Mixtos, agigantados*）のようなものであり、一方では使用者の合同防衛会議であり、他方では労働者のそれ（合同防衛会議、同盟）であって、かつ、上部が一つに連なっていて存在している（上部は一片、一個の連合体になっている）。今日、組合的団体主義国家政府（*el Estado corporativo*）なるものはそれが存在しているわけでもなく、更にはそれが良いものかどうかとも知られていないのである。イタリアにおける組合的団体主義の法律（団体主義組合法）は、ムッソリーニ（*Mussolini*）自身の言によれば、出発点にあつて発足したばかりであり、かつ、わが国政治家たちが組合団体主義国家の在るべき姿を（企図して）考えているよう（な形）には到達点（目標ゴール）に来ていないのである。

世界（*el mundo* 世の中）が足場を失って瓦壊する時には技術的な手直し（張り替え）をして救済されるわけにはゆかない。全ったくの新しい秩序が（秩序を全部樹て直すことが）必要なのである。しかも、この（場合の）秩序（新しい秩序）はもういちど個々人に根を下ろさなければならない（*individuo* すなわち個人主義から根着かなければならない）。宗教主義国家（*panteísmo estatal* 国教）を説く簾でわれわれを非難する者（人たち）は上述のこのことを（よく）聞いてもらいたい。われわれは基本的な（結合の）単位として個人（主義）を考えているのである。つまり、この個人（主義）こそイスパニアの精神なのであり、これこそが（この考え方こそが）人間を永遠の価値の齎らし手として考えて来たのである。人間（人類）は自由でなければならない。然しながら一個の秩序の中でなければ自由というものは存在しないのである。

自由主義は人間に、欲するところ（のもの）を（何でも）為すことができる（何でもしてよろしい）と言った。然し、そうした自由の保障となる筈の経済秩序を人間に保障することはしなかった。

（だから）つまり、組織立てられた経済的保障が必要なのである。然しながら、現に経済的混沌（無秩序）が生じている（生じた）以上、（もはや）強力な政府国家（*el Estado fuerte*）なしには組織的な経済（体）は存在し得ない（持たれ得ない。）かつ、目指す目的の統合統一に役立つ（奉仕する）国家政府（*el Estado*）は圧制的専制君主国になることなくしてのみ強力強大なものとなり得るのである。上述のその点でこそ私は国家政府が如何に統合（統一）の自覚の奉仕者であり、個人の自由の真の保障たるものであるかということを申し上げているのである。これに反して、最高の統合（統一）の奉仕者であることを考えない政府国家は絶えず圧制的専制の暴君となって行くことを恐れさせるものである。このことこそがイスパニア国政府の場合なのである。みずからの腕をこまねいて血なま臭い流血の革命の後に（革命を通して）裁きをつけようとすることは、心奥にみずからの判断の欠如を、果すべき使命の欠如を自覚する者（のすること）なのである。

イスパニアは強力な政府国家を持つことができ（許され）ている。つまり、それ自体の中で普遍世界を目指した（している）統合統一体だからである。また、イスパニアの国家政府は（ひたすら）権力の枢要な機能（要素）の完遂（の任を帯びて）に伝統的な巨大な財産（門閥地位・地歩）をもった諸機関（企業）に（をして）その任を解き、今や（もはや）多くの経済面（性格側面）で調停審

判ではなく完全な規制を果たして行くことが出来るのである。また、今や、労働関係（関連）の現実の（体制）樹立により、寄生的な建築建造物ではなく（なった）、いっさい（の挙った）縦割上下垂直型の統合となった産業労働組合の生産の各部門を実現するために協働（協力）させているのである。

国家政府は、イスパニアの領域分野を、統合の次元理論（規定）を以って新たに再編成しなければならない。イスパニアの全土が居住可能なわけではない。砂漠を、また、とりわけ森林を取り戻さなければならない。多くの土地は、それらを耕やす者の悲慘を永続させるためにのみしか役立っていないのである。土地全体が耕地に移行されなければならない。つまり、深奥からの経済改革の、また農業の深奥からの社会改革の対象（目的）とならなければならない。耕作の豊穰化と合理化、灌漑、農牧業教育、収支相償う価格、農業への関税上の保護、低利の信用貸付の付与（が必要）であり、かつ、他方では、家産（家族の世襲相続財産の形成）と産業労働組合の耕作（が必要）である。これこそ（農業・農業国へのイスパニアとなる改革）が真の自然への復帰であり、ルソーの云う牧歌的田園の意味のものではなく、農業（立）国の意味で、土地（機能）を理解する奥深く、真剣な、かつ、慣習儀礼に従った改革なのである。

農村（*el campo*）が再編成されて行く統一（統合）のその次元理論規定を用いて経済全体を再編制（再組織）して行かなければならない。上述のこのことは資本と労働の均衡調和について（考えてみるとき）はいったい何を意味するものであろうか。労働は人類（人間）の機能であり、この人類（人間）の貢献が財産となるのである。然しながら、財産は（即）資本なのではない。資本は一国の経済の道具（経済財、経済手段）なのであり、道具・手段として経済全体の役務用役に宛てて措定（措置）せられなければならないのであって、何ん人（びと）の個人的な福利にも宛てがわれてはならない。資本の貯め池（貯水槽）は水の貯水池と同じ（ようなもの）でなければならない。水面に（用水溝を）組織（組立て仕つらえる）するだけのための用水溝ではなくて、河川の流れ（流路）を規制し、水しぶきでタービン（水車）を動かすためのものでなくてはならない。

上述のこうしたいっさいのものを扶植導入するためには、したがって直ちに計り知れない数々の抵抗を克服しなければならないのである。あらゆる利己主義が反抗して来る（反抗する）ことであろう。然しながら、われわれが守らなければならない指令（下された命令）は上述のこれ（いっさいの抵抗を克服せよという命令）なのである。物質的なもの（ところ）を救済することが問題なのではない（扱われているのではない）。これまで（今まで）われわれが考えて来たような財産はそれ自体がその目的（目標）になるに到る。（触れて到達する財産獲得が即対象目的となり、財産がそれ自体自己目的を表わすことになる。）善きにしろ悪きにしろ、集積（財産の集積）はその自己目的を完遂（完行）して行くし、多くの場合（殆どの場合に）存在理由を持ち、かつ、加うるに（のみならず）力（威力）を持つことになる。物的なものを救う（救済し得る）者は（もはや）誰もいない。重要なことは、物的なものの災禍が精神の大事な（肝心要めの・緊要な）価値を（まで）も破さいし荒廃させないようにさせなければならないことなのである。そして、このことこそが、（どんなに

高価な犠牲との引換えに（して）でもわれわれが自ずから（進んで）救済しようとしているところなのである。上述のこうした犠牲こそが、われらの祖国イスパニアが辺境蛮族異人種文化の徹底的な（壊滅の打撃的）侵略（侵入）を抑止する光栄（栄光光輝）に値いする榮譽を完全に荷なう（ことのできる）ものなのである。

（1935年3月3日、バリャドリーのカルデロン劇場で述べられた講演— *José Antonio Primo de Rivera, Dignidad Humana y Justicia Social*『人間性の尊厳と社会正義』，政府出版物，1957年5月初版，29～35頁）

（２） 女性（*lo Femenino*）とファランヘ

〔1935年4月28日ドン・ベニート（バダホス）における講演（討議）と云葉（談話）〕

このイスパニアが、多くの人々（*por muchos*）によって甚だ（大いなる程度に）忘れられ乃至は誤解されて（悪しざまに扱われて）いるところ（こと）を（すなわちどんなに忘れられ、誤解されているかを）学習し学び取る目的（ために）で君たちに話をしに來て諸都市（町々）との接触が保たれること（の）は大事な（必要な）ことである。然し、君たちは（イスパニアを）心の奥深く収めていてその名前とその偉大さを熱愛をこめて守って（防備・防衛して）いるのである。わが国の土地はきわめて豊かで富んでいる。わが国の土地はイスパニア人の二倍の人口に尊厳で人間的な生活を付与する（配分する）能力を持つのであるが、それらの人たち（イスパニア人たち）の今日イスパニアに住んでいる者のうち、大半の多くの場合が惨たんたる人間的には基底の下層的、動物の場合にも劣る条件の中で暮らしているのである。わが国の土地は加うるに（のみならず）、嘗て往昔の時代には世界の主（あるじ）であったのであり、他の多くの諸国の土地に生活と精神を与えた。今日では遂に、衰退弛緩の、貧乏なかつ（ふさぎ込んだ）意気消沈の、栄光についてのすべての野望と公正・正義の全面的熱意を欠いた生活を（している）かこっている。上述のこのことはたゞ単に、国民生活を独占した一握の政治家のためのみの優先的利益（優位性）を伴った、一連の支離分裂の状態に変わり果てる（変ってしまう）こと（結果）になるように、統合（結合）体であることをわれわれがやめてしまった（統一性を失った）ことから来る（來ている）のである。つまり、思うに、われわれ（の力）でイスパニアの上述のその統合（統一体）は再建されなければならないのであろうし、上述のこのことは現世では不可能なのであるから従って君たちが、（それ）イスパニアが樂園に変らないかどうか（について）の保障をして欲しいのである。われわれには、富源の集積が国家（*nación*民族国家）にとっては無益でかつ害悪（弊害）となるように制限（限定）されて來ていて、特定民間個人の権力についての希望（野望）を満足（充足）させるためにのみしか役立たないであろうから（こそ）、皆んな（全員、誰しも）がより良く生きて行こうとするのであろう。われわれが、一連の金融機関を抹殺して（廃止して）しまったであろうからこそ、人間性の経済に対

するいっさいの熱意（熱量）を奪い去ってかなぐり捨てさせてしまっているのである。また、国民全体の努力が、一握の少数者の利益（恩典*beneficios*）を防衛するのではなく、全員の生活を改善するように指揮せられ（仕向けられ）ているからなのである。われわれはイスパニアの現実の生活で（と）妥協していることはできない（許されない）のであり、単に外的な枠組（骨組み）だけにとどまらず（だけではなく）イスパニア人の在り方を変えて全面的にイスパニアの生活を変遷せしめて行かなければならないのである。

われわれは一個の政党も一個の階級も爾余の（他の）ものに打勝つことを欲しているわけではない。われわれは、イスパニアが、いっさいの個々人の意思がその中で根着いて実現されるような、未来の事業を備えた結合（統合体）として勝利して行くことをこそ願うのである。

上述のこのことをわれわれは最大の犠牲を払ってでも達成しなければならない。つまり、他に目標もなく、明日の世の中に到達すべき野望も持たずに、無気力な、理想（理念）の欠如した（を欠いた）生活を送るよりも、上述のそのような事業の奉仕に没頭することが何層倍もまし（か知れない）だからである。

人生はその中で大きな仕事の実現されて行くか、若しくは少なくとも意図されて行くときにこそ（その場合にのみ）生き甲斐に値するのであって、われわれには、新しいイスパニアを創り上げる生活（創成の生活）より他に（をさし置いて他に）それ以上のものは理解できないのである。

* * *

〔討論集会後に、ホセー・アントニオによりドン・ベニートにおいて一同志に語られた談話〕

諸君たちは、われわれのお別れの歓送会にエスツレマヅーラの女性たちをわれわれに同伴せしめようと望んだ（欲した）。だが、（ひょっとして）若しかしたら君たちは女性とファランヘ（労働機関党）との間に存在する深い親近性をまるで知らないのかも知れない。（まさに）確かにファランヘ党ではわれわれにはおよそ優雅なやさしさも、女性解放論もあつたためしがなく馴染みがないのだから、君たちには他党（党外）のことはいっさいよく分らないのであろう。（分らないのも無理はない。）優雅で大らかな物腰は女性に対する媚態（おもねり）以外のなにものでもなかったのである。女性からいっさいの真面目な思慮（深慮）（から遠のけて）を奪うにはほんのちょっと（した）甘い言葉（お世辞）を用いただけで手込めにして籠絡できたのである。彼女を軽薄な飾り気たっぷりの役割（職場の花に飾るなどの）に廻しておくためには、女性は口先だけの甘言で（一言甘い言葉で釣るだけで）有頂天になって嬉しがらせ、馬鹿げたくだらぬ想像をひろがらせ（思いをめぐらせしめ）られたのである。われわれは女性の入り込み得る使命（を）がどの（入江）辺りにまで誘導出来るものであるかを知っているし、また（決して）必らず甘言（お世辞）の対象（受取人）である馬鹿者女として女性を取り扱う（遇する）ことには甚だ用心をして慎重（な態度で接していかなければ）でなければならないのである。

われわれはまた女性解放論者なので（は）もない女性を尊重（畏敬）する方法が、彼女の素晴ら

しい目的（本来の在り方、仕向先）から引取らせて（身を引かせて）その女性に男性の機能（男の役）を（交付する）引渡すことにあるかどうかはわれわれには分らないのである。（そうあろうなどとはわれわれには合点が行かないのである。）女性が一男性の競争者（競合相手）であるという病的な満悦振りで一何もかもすべてだいなしにして失ってしまい対抗（性）意識に夢中になりわれを忘れて羽目を外しながら男のする訓練を受けている彼女女性を見ては私はいつも悲しい思いをさせられて来た。真の女性解放（論）は、女性達に対して、今日では勝っていると（勝ったものとして）尊敬評価せられている諸機能（諸職能）を要求することに在るのではなく、そうではなくて、女性の諸職能（機能）に、人間的かつ社会的な尊厳性をいっそう大きく張り廻らせて（太らせて）行くことにあるのでなければならないのであろう。

然しながらそうは云ってもわれわれは女に優しい（優しく云い寄る）わけでも女性解放論者であるわけでもない。此処に申上げておくが、疑念の余地なく、われわれの上述の行動は、肝要な或る特定の側面性格で、現存（現在）の女性解放論の意味を最も良く要約（締めくくって）してまとめている（現わしている）のである。諸君たちは、まぎれもなく（疑いもなく）上述のこの宣言を、男子青年の（素晴らしい）巨大な数多の隊列—上述のこの点では、命令者に従っている限りの（いっさいの者の）範囲の全員—よりも劣る（ひけを取る）その命令者の口から期待してはならないのである。

個人の若しくは集団の精神的行動（活動）は常にこれら二つの挺子（*palancas* こう桿）の（うちの）一方に対応（応答）している。すなわち、利己主義と自己抑制（犠牲・忍従）である。利己主義は快感（感覚）的満足感の直接的獲保を探し求める。克己忍従（*la abnegación*）は上位の秩序（地位者）に敬意を表して（上位者・上司に敬意を表して）感覚的快感を諦め放棄する。つまり、若し両性に（*a los sexos*）上述の二つのこう桿（挺子）への結びつきにおけるいずれを上にする（優先させる）かを決め（指定し）なければならないとするならば（決める必要があるとするならば）、利己主義のそれ（槓桿・挺子）は男（性）に対応するに違ひなからうし、また、克己忍従のそれ（槓桿・挺子）は女（性）に対応するに違ひあるまい。男（性）は一娘さんたちにはひょっとして貴女たちの拠り所としていところを多少見下だして切下げた上述のこの云い方（表白）をしていることは申訳けない次第であるが一男（性）はまったく手もつけられない程に（*torrencialmente*）利己主義なのである。これに引きかえ（逆に）、女（性）は殆ど常に課業（ *tarea* 仕事）への、服従的・奉仕的な、忍従献身の生活を受容する（*acepta* 受入れて応ずる）のである。

ファランヘ（機関労働党）も上述のこうしたものである。われわれ、党に参加入団する（*militamos*）者は、快適性や、休息や、あまつさえ、古い友情と（特に）深い（親密な）愛情（情愛の限り）でさえも捨て去らなければならない。われわれは、（われわれの肉体を負傷者の裂状に措置して）粉骨碎身して行かなければならない。われわれは死を一われわれの（最良の）優秀なかなりの数の者がわれわれにそれを示したように一奉仕の行為（役務）と考えなければならない。また、何よりも悪いことに、歪曲変形し、解釈を曲げた、変屈（素直でない）的な、われ関せず焉の無関心的利己主

義の、自分たちを理解しようとしないう者の敵対反抗（性）にもかかわらずわれわれは場所から場所へとかなり立てながら行かなければならないのであるし、また彼らがわれわれを理解しないからこそ彼らはわれわれに憎悪の念を持っている（憎んでいる）のであり、彼らの侮蔑からわれわれを秘めたる視線の（を持つ）下僕であるか若しくは正真正銘の憂慮心配を持つふりをして（そうした態度をとって）いる者と想像しているのである。ファランヘ（機関労働党）はこうしたものなのである。また、まるで奇蹟が働いたかのように、ファランヘ（機関労働党）では利己主義（我慾）を期待できる度合が減って行く可能性があり、況してやそれが（利己主義が）増大し、増幅されて行くことは許されないのである。倒れて行く一人々々の英雄により、逃亡する一人々々の臆病者により、その場所（地歩）を占めるための10人、100人、500人が現われる（多ければ多いほどそのような性格の党になる）。

女性たちよ、見給え。われわれがどのようにして美德（徳義）中の第一の美德（徳義）を為し遂げて来たかを。忍従（*abnegación*）、これこそは就中、貴女たちのものなのである。上述のそれ（忍従）で願わくばわれわれは甚だ高度（の域）に到達したいところである。願わくばわれわれは上述のことで甚だ女性解放論者（讃美論者）たるに到りたいものである。そうやってこそ、何時の日にか、貴女たちはわれわれを（真底から）本当に「男性たち」と考えることのできる時が来るのである。

——«*Arriba*»（弥栄）1935年5月2日 第7号——